

企画展の記録

年史編纂室

2019年度秋学期企画展

「スポーツの人 五輪の哲人

大島鎌吉」の記録

はじめに

本学の卒業生である大島鎌吉氏は、1932（昭和7）年のロサンゼルスオリンピック陸上三段跳びの銅メダリストで、1964（昭和39）年開催の東京オリンピックでは日本選手団団長、選手強化対策本部長の重責を担い、その後も日本スポーツ少年団の発足や、大阪体育大学の創立などに関わり、晩年には、アジアで初めてとなる「オリンピック平和賞」を受賞している。

東京2020オリンピック・パラリンピックを迎えるにあたり、本学では、大島鎌吉氏が残したスポーツ哲学を再評価し、氏の説いたオリンピック精神における「フェアプレー精神」や「文武両道」を広く発信するために、企画展とシンポジウムを開催することになった。

年史編纂室は企画展を担当し、企画展「スポーツの人 五輪の哲人大島鎌吉」は、2019年10月1日（火）から2020年3月14日（土）までの会期で開催された。また、シンポジウム「大学スポーツとオリンピック・パラリンピックの精神」は、2019年11月30日（土）に千里山キャンパスのBIGホール100を会場に開催された。

一 展示パネル

企画展示室には、展示パネル10枚（ごあいさつ1枚、大1枚、小8枚）を掲示し（大パネルのみ本文縦書き）、大型ケースに関連資料や写真を展示した。

ごあいさつ

年史資料展示室では、2019年度下半期の企画展として「スポーツの人 五輪の哲人 大島鎌吉」を開催します。

大島鎌吉は、1932（昭和7）年のロサンゼルスオリンピック陸上三段跳びの銅メダリストで、1936（昭和11）年のベルリンオリンピックにも出場しました。戦時中は毎日新聞社のベルリン特派員を

務め、戦後は運動部記者のかたわら、陸上競技で後進の育成にあたりました。1964（昭和39）年に開催された東京オリンピックでは日本選手団団長、選手強化対策本部長の重責を担い、その後も日本スポーツ少年団の発足や、大阪体育大学の創立などに関わり、晩年には、アジアで初めてとなる「オリンピック平和賞」を受賞しました。

さまざまな「スポーツの顔」を持った大島が生涯をかけて考えたのは、スポーツと平和の関係でした。大島は若いころからスポーツ思想をあらゆる媒体で表現し、「跳ぶ哲学者」と呼ばれました。そして、その精神を継ぐため、関西大学は1989（平成元）年に「大島鎌吉スポーツ文化賞」を制定しました。

二度目の東京オリンピックを明年に控えた今、大島が取り組んだオリンピックズム（五輪精神）に根ざした青少年教育や平和活動の軌跡をあらためて振り返り、スポーツが、オリンピックが、平和にどう貢献できるかを考えるきっかけになればと思います。

2019年10月

関西大学年史編集室

大型パネル

大型パネルは、「スポーツの人 五輪の哲人 大島鎌吉」のタイトルで、六つの項目により大島鎌吉氏の事績と思想について概観するパネルとした。

スポーツの人 五輪の哲人 大島鎌吉

ロサンゼルスオリンピック銅メダリスト

明治41年（1908）11月に誕生した大島鎌吉は、金沢商業学校時代の昭和2年（1927）、第8回上海極東オリンピックで準優勝するなど、早くから才能を開花させた。卒業後、大阪の関西大学を選んだのは、日本は東京と大阪の両輪駆動でなければならないという理由からである。

関西大学在学中の昭和7年（1932）8月、大島はロサンゼルスオリンピック陸上三段跳びで銅メダリストとなったが、本番の数日前、選手村でガス風呂の爆発事故に遭遇し、包帯を外したばかりの状態で15m12を跳んだというエピソードを残している。

二度目のオリンピック ベルリン大会出場

昭和9年（1934）、関西大学を卒業した大島は毎日新聞社に入社。運動部記者であるとともにアスリートとしても競技を続けた。昭和11年（1936）のベルリンオリンピックには日本選手団主将として参加した。有望視されたが、記録は15m07。6位入賞は果たしたものの、メダルには手が届かなかった。

平和の祭典 東京オリンピックで選手団長として行進

昭和39年（1964）10月10日、抜けるような青空のもと、東京の国立競技場でオリンピックの開会式が行われた。日本選手団は各国選手団が入場した最後に登場した。白いスラックスとスカートに赤いジャケット、白い帽子のいでたちで整然と行進する姿に観客席からは、

ひととき大きな拍手が沸き起こった。このとき大島は、日本選手団団長として旗手のすぐ後ろ、選手団の最前列で行進した。

アジアで初の「オリンピック平和賞」受賞

昭和57年（1982）5月26日、大島のもとに吉報が舞い込んだ。「オリンピック平和賞」受賞の知らせである。賞の正式名称は「ハンス・ハインリッヒ・ジーフェルト賞」。ジーフェルトは戦前のドイツで勇名をはせた陸上十種競技の名選手であり、戦後は西ドイツのスポーツ復興に貢献した。

青少年教育や国際交流を推進したが、大島に賞が贈呈された理由であったが、日本のみならず、アジアでも初めての受賞となった。

「大島鎌吉スポーツ文化賞」の制定

昭和60年（1985）3月30日、オリンピック平和運動の泰斗をはじめ、さまざまな顔を持つ大島が永遠の眠りについた（享年76歳）。

3年後、関西大学体育OB会は大島の生前の功績を称え、その遺徳を継ぐため「大島鎌吉スポーツ文化賞」の制定を決定し、翌平成元年（1989）3月30日、大島の命日に第1回贈呈式を挙行政した。

選考委員会は「大島鎌吉スポーツ文化賞」に①ホップ賞（関西大学スポーツ文化賞）、②ステップ賞（関西学生スポーツ文化賞）、③ジャンプ賞（日本スポーツ文化賞）、④トリプル賞（国際スポーツ文化賞）を決めた。

このうちトリプル賞の孫（ソン）基（ギ）禎（ジョン）氏は、マラソンの日本代表としてベルリンオリンピックに出場し、金メダルを獲

得した朝鮮出身のランナーで、戦後、韓国の陸上界で後進の育成に力を注ぎ、昭和63年（1988）のソウルオリンピックでは聖火ランナーも務めた。大島と孫は死ぬまで兄弟のような付き合いを続けており、第1回のトリプル賞受賞にあたっては、孫自身のもとへ届くまでに数奇な運命をたどった古代ギリシャの青銅製カブト（レプリカ）が関西大学に寄贈された。大島との友情の証であった。

2020年東京オリンピック「平和を祝う場」再び

大島が書き残した原稿に次のような一節がある。

「オリンピックは大宗教団体である。オリンピック宗の本尊は『フェアプレー』。世界共通の理念である」。オリンピックは「フェアプレー」を信じる地球上の人々の願いが集まる世界宗教というのが大島の想いである。

大島はオリンピックを「開催する」ということばを嫌い、「祝福する」と表現すべきであったとした。オリンピックは単に勝敗を争う大会ではなく、4年間の平和運動を世界の人々が祝う場だと考えていた。昭和39年（1964）から56年の時を越えて挙行政される2020年東京オリンピック。「平和を祝う場」が再び日本に巡り来る。

写真1 ロサンゼルス五輪銅メダルジャンプ

写真2 東京五輪日本選手団入場（最前列向かって左端が大島）

写真3 オリンピック平和賞のブロンズ像とともに

写真4 大島鎌吉（肖像）

二 小パネル

小パネルでは、「大島鎌吉ものがたり」と題して、大島氏の生涯をたどり、大島氏が残した言葉を紹介する内容とした。

【大島鎌吉ものがたり① ロス五輪で銅メダリスト】

金沢から関西大学へ

1908（明治41）年11月10日、金沢市に生まれた大島鎌吉は、金沢商業学校に進学後、三段跳びに熱中し、国内の大会だけでなく、1927（昭和2）年8月に開催された第8回上海極東オリンピックでも準優勝するなど、早くから非凡な才能を開花させた。

卒業間近、当時、格段に強かった関東の大学からの勧誘をはねのけ、「何も出さなければ、来てくれ」と説得した関西大学の気概に感動し、大阪行きを選択した。「日本は、東京と大阪の両輪駆動でなければならない」という反骨精神からの決断でもあった。

写真1 金沢商業学校時代の大島

写真2 昭和初期の千里山学舎

ロス五輪で銅メダル

1928（昭和3）年、関西大学予科に入学した大島は、1932（昭和7）年のロサンゼルスオリンピックに三段跳び選手として出場した。この種目は当時、日本のお家芸と呼ばれ、大島とともに出場した織田幹雄（1928年のアムステルダム五輪金メダリスト）、南部忠平は「3本の日の丸」と必勝を胸に秘めていた。結果は、南部が15m

72の世界新記録で金メダル、スウェーデンのスペンソンが銀メダル、大島は15m12で銅メダルを獲得した。

ところでこのとき、大島は競技本番3日前の8月1日に起こった選手村でのガス風呂爆発により両脚や腹、両腕に大やけどを負い、競技当日の4日は包帯を外したばかりの状態であった。関係者は、あの身体で、と感嘆するとともに、その精神力の強さを賞賛した。

写真3 ロス五輪三段跳びメダリスト（右・大島）

写真4 ロサンゼルス五輪の銅メダルジャンプ

写真5 ロサンゼルス五輪三段跳び3位の賞状

【大島鎌吉ものがたり② 二度目のオリンピック、ベルリン五輪出場】

ベルリンオリンピックに関西大学から6選手

「美の祭典」「民族の祭典」と呼ばれた1936（昭和11）年のベルリンオリンピックに関西大学からは大島、長尾三郎（槍投げ）、戸上研之（走り幅跳び）、古田康治（110mハードル）、福田時雄（400mハードル）、谷口睦生（短距離）の6選手が出場した（早稲田大の8名に次ぐ）。大島はこのとき、陸上選手団の主将を務めた。

1934（昭和9）年に15m82の世界新記録をマークしていた大島ではあったが、ベルリンでは、1回目の跳躍15m07が最高という成績で、2大会連続のメダルには届かず、6位入賞となった。

写真1 ブレーザー姿のベルリン五輪選手（古田・戸上・福田・谷口）

写真2 ベルリン五輪での跳躍

写真3 世界新記録を樹立した時に贈られたブロンズ像

名選手を育んだ「東洋一」のグラウンド

大島たちが活躍した背景には、当時「東洋一」と呼ばれた千里山学舎の大グラウンドの存在が大きい。400mトラックのほかに野球やサッカー、ラグビーなどの施設と1万人の観客を収容できる扇形スタンドを設けた大グラウンドの完成は、昭和初期のスポーツ黄金時代を招き、数多くのオリンピック選手や名選手がこのグラウンドから育っていった。

さらに、大島たちだけでなく、早稲田OBの織田幹雄（1928年アムステルダム五輪金メダリスト）や南部忠平（1932年ロサンゼルス五輪金メダリスト）もここで汗を流した。「東洋一」の大グラウンドは、日本のトップアスリートたちを育んだ栄光のグラウンドであった。

写真4 グラウンドをバックに（左・大島）

写真5 扇形スタンドを備えたグラウンド

栄光のグラウンドを偲ぶ記念碑と大島邸から移植された月桂樹

関西大学創立100周年を期し、この栄光のグラウンドの南側半分に総合図書館・情報処理センターが建設されることになった。当時、体育OB会長を務めていた大島は、大学発展のために「知の殿堂」である総合図書館建設に理解を示した。

開館式は1985（昭和60）年4月11日に挙行され、同日、正面階段の左手に建立されたグラウンド記念碑の除幕式も行われた。さらに4年後の1989（平成元）年3月には、大島の自邸に植えられていた月桂樹が記念碑の右側に移植され、由来をしるした解説板とともに

大島の五輪精神を今に伝えている。

写真6 総合図書館前に建つ記念碑と月桂樹

【大島鎌吉ものがたり③ 戦争体験が平和思想の原点】

ドイツ・ベルリン特派員

「防共協定」でドイツに招聘された日本陸上競技連盟は、大島を監督とする選手団を派遣した。1939（昭和14）年8月、第8回ウィーン国際学生大会に参加している最中、第2次世界大戦が勃発した。選手団は北欧に脱出して帰国の途についたが、大島は毎日新聞社のベルリン特派員としてドイツが降伏するまでの6年間、ドイツに駐在することになる。

写真1 ベルリンオリンピック報告書の表紙

写真2 ベルリンオリンピック報告書の内部

写真3 大島のアルバムに残された「開会式当日旧宮殿前の雑踏」と説明のある写真

消えたベルリン陥落の特報

1945（昭和20）年5月、ソビエト軍のベルリン侵攻時、ヒトラー総督が自殺したとの情報を得ていた大島は、ベルリン陥落の一報を東京に向けて打電した。その後、大島は兵士につかまり、7月中旬、帰還兵を運ぶ国際列車に乗せられ、シベリアを経て京城に到着した。九死に一生を得た大島を迎えたのは、ベルリン五輪マラソン金メダリストの孫基禎を初めとした朝鮮の五輪関係者であった。

8月1日朝、空襲警報が鳴り響く京城空港を飛び立った双発機に搭

乗した大島は、6年ぶりに祖国の土を踏んだ。すぐに出社した大島は、自分が打電した「ベルリン陥落」の特ダネ記事を探したが、国際回線の混乱か、検閲の結果か、結局記事は見当たらなかった。

思い出の町ベルリン

現在、関西大学に保存されている51冊を数える大島のアルバムの中には、戦前と、破壊状態が残る戦後の写真が新旧対比して貼られた「ふたつのBerlin」と題するものがある。

特派員として6年、命をかけて過ごしたベルリンは、大島にとって思い出深い町であった。

写真4 「二つのベルリン」と題するアルバムに収められた新旧のベルリンを対比した写真

大島の平和思想の原点

大島の平和思想の原点は、従軍記者として欧州を駆けめぐった戦争体験に求められる。著書『死線のドイツ』で大島は、戦場での凄惨な状況を生々しく描き、「フィンランドの誇りであったかつてのオリンピックの花形達が、何故にその八割も戦場の露と消えねばならなかったか」と表現した。この強い怒りがその後の生き方を決め、五輪精神を具現化する青少年教育や平和運動に人生を捧げることになるのである。

【大島鎌吉ものがたり④ 東京五輪運営の中心に】

オリンピックを東京へ

1959（昭和34）5月末、1964年の開催地を決める国際オリ

ンピック委員会（IOC）総会が開かれた際、平沢和重（もと外交官・NHK解説委員）は「小学校国語 六年」の教科書を手に「五輪の旗」という話を紹介して招致演説を行った。これは戦後まもなく大島が小学生向けに作った『オリンピック物語』に執筆した話が題材になっており（教科書監修者の一人は志賀直哉）、五輪旗の五つの輪は五大陸を示し、「スポーツを通して世界の国々を結びつけようとした」と記されていた。スポーツの貢献を信じ、平和の夢を子どもに託そうとした大島の信念の現れであった。

招致活動では、大島自身も「オリンピック・メダリスト・クラブ」という組織を作り、世界各国のアスリートに東京招致をPR、総会前には東欧諸国を回ってロビー活動も展開した。結果、総会ではデトロイト、ウィーン、ブリュッセルを大きく引き離し、東京が圧勝した。

写真1 『オリンピック物語』

写真2 オリンピックの前年に開催された毎日新聞東京本社有志による「大島鎌吉氏激励会」（右・大島）

選手の強化と金メダル15個の公約

東京開催が決定した1959（昭和34）年、選手強化対策副本部長に就任した大島は「選手強化5カ年計画」を策定した。1～2年目は国内の強化組織を整備し、対象選手1600人を選び出す。3年目は強化選手に体力をつけさせ、4年目にはそこに技術を結びつける。そして仕上げを経て選手団を編成するという内容であった。

東京五輪開催1年半前の1963（昭和38）年4月、選手強化対策本部長となった大島は翌年1月に国会のオリンピック東京大会準備推



展示室の小パネル展示

進特別委員会に参考人として呼ばれ、メダルの予想数を尋ねられた。このとき大島は、それまで最多の1932（昭和7）年ロサンゼルス大会の7個を一気に倍増させ「金メダルを15個以上獲得する」と宣言した。金メダルをほぼ確実に取れるのは12個。取れるかもしれないのは18個。足して30個を2で割って「15個」というのが算定の根拠であった。数年前からすべての競技の情勢を分析していた識者と相談して出した結論であった。

結局、日本選手が獲得した金メダル数は16個で、アメリカ、ソ連に次ぐ3番目の成績。この数字は2004（平成16）年のアテネ大会と並び、今も最多記録となっている。

写真3 東京五輪後、第2学舎で講演する大島（1964年11月25日）

写真4 東京五輪レスリング金メダリスト市口政光選手（前列左）・中谷敬寿学長（同中央）・大島（1964年11月25日）

【大島鎌吉ものがたり⑤ 平和の祭典・オリンピックがもたらしたもの】
1964年東京オリンピック

1964（昭和39）年10月10日、「世界中の青空を全部東京に持ってきてしまったような、素晴らしい秋日和」（NHKテレビ実況）の国立競技場で、白い帽子に赤いジャケット、白いスラックス・スカートという装いの日本選手団が、各国選手団の最後を飾って入場してくると、ひと際高い拍手と歓声が沸き起こった。日本選手団団長である大島は、先頭の国旗に続く列の役員の1人として行進した。

15日間に及ぶ熱戦が繰り広げられ、数々の名シーンを残したオリ

ピックは10月24日、閉会式を迎えた。午後5時、式典は各国旗手の入場で始まったが、直後、予想もしないシーンがテレビに映し出された。外国の選手が日本の旗手を担ぎ、各国入り乱れて登場したのである。このとき、大島は日本役員団の中を行進しながら友好の雰囲気をかみしめていた。後日、親しい後輩にこう語ったという。

「世界平和のためにオリンピックが必要だというのは、ああいうことなんだよ」。

写真1 開会式当日のスケジュールが記された大島の手帳

写真2 行進練習時の大島

写真3 日本選手団の入場(国旗に続く列の向かって左端が大島／提供…毎日新聞社)

【大島鎌吉ものがたり⑥ 大島の平和思想に影響を与えた人びと】

オリンピック平和賞

ベルリンオリンピック陸上十種競技優勝者ハンス・ハインリッヒ・ジーフェルト氏を讃え、オリンピック出場選手や指導者の中から年に一人だけ選ぶ「ジーフェルト賞(オリンピック平和賞)」を、大島は1982(昭和57)年7月に日本人初、世界で11人目に受賞した。

受賞の推薦状を書いたのは、西ドイツ陸上チームを長く率いたマインツ大学のベルノ・ウィッシュマン博士である。大島とは旧知の間柄で、1980(昭和55)年におきたモスクワ五輪のボイコットに対し「政治がスポーツを利用すべきではないと猛反対した」点でも大島と同じ考えをもっていた。

写真1 ベルノ・ウィッシュマン博士と大島

写真2 オリンピック平和賞のブロンズ像とともに

人生の師カール・ディーム

人生の友ウィッシュマンに対し、人生の師はカール・ディーム博士であった。1936(昭和11)年のベルリンオリンピックで聖火リレーを発案し、「スポーツの哲人」と呼ばれたドイツのスポーツ史家である。1947(昭和22)年、ディームはケルン・スポーツ大学を設立した(初代学長)。このとき大島は、日本と同じく敗戦国になったドイツが、スポーツでも復興の道を歩み始めたことに力を感じていた。のちに大島自身も大阪体育大学の開学に関わったが(副学長に就任)、この点はディームの影響を受けたのかもしれない。

ディームと大島はクーベルタンが掲げたオリンピックズム(五輪精神)を共有しており、根底には、文明社会の中でスポーツが人間の心身を調和させ、オリンピックが世界を結ぶ平和運動になるとの信念を持っていた。

写真3 カール・ディーム博士

「ノエルベーカー教」の信者

もう一人、大島に強い影響を与えたのが、史上唯一の五輪メダリストでノーベル平和賞受賞者、フィリップ・ノエルベーカー卿である。大島は「この核の時代に、人類にとって最大の希望は、オリンピックが存在することである。オリンピックこそは史上最大の平和運動である」というノエルベーカーの口癖を好み、彼をこよなく尊敬した。

「スポーツの敵は憎しみの敵ではなく、潜在能力を引き出してくれた

得がたい友人、愛情を持つ仲間」。ディームやノエルベーカーとの交流を経て得たこの考えは大島の原点となり、生涯その思想を实践したのである。

若者の心に願いを託し

オリンピック閉幕後、国民のスポーツへの関心が高まり、地域のスポーツクラブや施設づくりは、広く市民向けのものが考えられるようになった。

それに先駆けること4年、1960（昭和35）年6月の日本体育協合理事会で大島は、青少年時代をスポーツと体育に結びつけ、健全な育成を図ることを目的とする「日本スポーツ少年団」の結成を提案していた。トップアスリートを強化する一方で、底辺のスポーツを拡大することにも大島は強い関心を持っていた。「日本スポーツ少年団」は1962（昭和37）年6月、正式に発足。そこで育った選手が、日本代表トップアスリートとして、その後のオリンピックにも出場するようになった。

【大島鎌吉ものがたり⑦ オリンピック功労賞と大島鎌吉スポーツ文化賞】

オリンピック功労賞

1985（昭和60）年、大島は76歳で永遠の眠りについた。没後、国際オリンピック委員会（IOC）は「オリンピック功労賞」を贈り、長年にわたる大島の功績を称えた。IOCでは、オリンピック功労賞は生存者だけに贈ると規定しており、逝去後に贈呈されたのは異例で、大島の世界スポーツに対する貢献度の高さがうかがえる。

写真1 「オリンピック功労賞」の賞状

写真2 「オリンピック功労賞」の首飾り

写真3 「オリンピック功労賞」のラペルピン

大島鎌吉スポーツ文化賞

大島没後4年の命日である1989（平成元）年3月30日、関西大学だけでなく、日本におけるスポーツ文化の振興・推進に資することを目的として「大島鎌吉スポーツ文化賞」が制定された。大島の三段跳び世界新記録15・82mにちなみ、1582名+αの有志からなる特別委員会が組織され、10名の選考委員によって2氏、2団体が第1回の受賞者に選ばれた。

ホップ賞（関西大学スポーツ文化賞）

金子 晃氏（青年海外協力隊員・ネパール在住）

ステップ賞（関西学生スポーツ文化賞）

園田学園女子大学硬式テニス部

ジャンプ賞（日本スポーツ文化賞）

財団法人日本アマチュアレスリング協会

トリプル賞（国際スポーツ文化賞）

孫 基禎氏（韓国）

また、文化賞の授与とともに、大島鎌吉記念・総合関関戦健康マラソン大会の開催とアフリカでオリンピックを開こう募金運動が事業の3本柱となっていた。

写真4 総合関関戦健康マラソン大会（ゼッケン1000番が大島）

友情の証し

トリプル賞を受賞した孫基禎は、1936（昭和11）年のベルリン五輪のマラソンに日本代表として出場し、2時間29分19秒2の世界新記録で優勝した金メダリストである。このとき、孫には副賞として古代ギリシャの青銅製カブトが贈られることになっていたが、孫の手に渡らないまま行方不明になり、1976（昭和51）年にベルリンの国立博物館にあることが分かった。孫は返還運動を起こしたが、その協力者の一人が大島であった。大島は知り合いのIOC委員らを通じて返還を働きかけ、1986（昭和61）年、ベルリン五輪50周年の記念行事で孫は、ようやく栄冠の品を手にした。現在、カブトはソウルの国立中央博物館で保存されている。

大島は、カブトが返還される前年に亡くなったが、二人は死ぬまで兄弟のような付き合いを続けた。第1回「大島鎌吉スポーツ文化賞」の受賞者を選ばれるにあたり、孫はカブトのレプリカを作って関西大学に寄贈した。大島との友情の証しであった。

写真5 孫基禎氏が友情の証しとして贈った古代ギリシャのヘル

メット（複製）

【大島鎌吉ものがたり⑧ 今も心に響く大島語録】

アメリカは、降つとらんかもしれんな。

ある雨の朝、陸上部の合宿所で、することもなく時間をつぶしていた部員たちのもとへやってきた主将・大島鎌吉の「お前たち、練習は」との問いかけに、ある部員が「今日は雨が降っていますから」と答えたとき、大島が発したことはである。これを聞いた瞬間、部員たちは

我先にグラウンドへ飛び出していったという。「日本は雨だが、外国では晴れて、ライバルたちは練習に励んでいるかもしれない。お前たちの対戦相手は、日本ではなく、世界なのだ」ということを端的に示したことばである。

（大島と同じ三段跳びの選手で、ベルリン五輪にも出場した戸上研之の回想）

伝統とは、日々、自分たちが練習を積み重ねて築くもの。先輩からもらうものじゃない。

総合関関戦で千里山のグラウンドに勢ぞろいした両大学の選手たちを前に、大島が語ったことばである。「昔のように強くなろう」と過去の栄光を追いかけてばかりで、新しく作る努力をしなければ伝統はすぐに消滅してしまう、というのが大島の持論であった。

（校友会機関紙「関大」341号、教育後援会会報「葦」66号）

スポーツの敵は敵ではない。潜在能力を引き出してくれた得がたい友人である。

「世界の若者たちが交流し、友だちになることの影響は、はかり知れない。戦争になっても友だちを鉄砲でなんか撃てない」と、スポーツが国境を超えて人間を結びつけることを、亡くなる直前まで大島は強く感じていた。

（1982年6月9日付朝日新聞「ひと」欄、2014年12月18日付毎日新聞「五輪の哲人 大島鎌吉物語33」）

若者は未完成だ。だから明日がある。だから魅力があるのだ。

晩年、大島は核廃絶平和運動を進め、日本の青年に世界と人間のあり方を考えてほしいとスポーツ界の牽引車になった。大島は、明日を担う青年に夢を託すロマンチストであり、信念のために闘う万年青年でもあった。

〔伴義孝著「大島鎌吉」『関西大学百年史 人物編』〕

写真1 大鹿鎌吉肖像

三 展示資料

縦型展示ケースには、大島鎌吉とオリンピックにかかわる様々な資料を展示した。展示資料と資料の解説文は次の通りである。

「大島鎌吉肖像写真」

「ロサンゼルスオリンピック賞状」

昭和7年（1932）8月、第10回ロサンゼルスオリンピック（アメリカ）の三段跳びで銅メダルを獲得した時に贈られた賞状。

「古代ギリシャブロンズヘルメット（限定複製品）」

このヘルメットのオリジナルは、昭和11年（1936）のベルリンオリンピックでマラソンの金メダリストとなった孫基禎氏にギリシャ政府が贈ったものであるが、当時の国際オリンピック委員会（IOC）は、個人への賞品授与を認めなかったため、長く西ベルリンの博物館に保管されていた。



展示資料

昭和61年（1986）、ソウルでアジア大会が開催された際、西ドイツ政府から孫氏に返されたが、この返還は大島らが長年にわたって西ドイツ政府に働きかけた結果であると言われている。

平成元年（1989）、孫氏が「大島鎌吉スポーツ文化賞」のトリプル賞（国際スポーツ賞）を受賞するにあたり、複製品が孫氏から関西大学体育OB会1582人＋α委員会の久井忠雄会長（関西大学理事長）に寄贈された。オリジナルのヘルメットは現在、ソウルの韓国国立中央博物館で展示・保管されている。

「オリンピック功労賞（賞状・ラベルピン・首飾り）」

昭和60年（1985）8月に大島が亡くなったあと、国際オリンピック委員会（IOC）から授与されたもの。IOCでは、オリンピック功労賞は生存者だけに贈ると規定しており、逝去後に贈呈されたのは異例で、大島の世界スポーツに対する貢献度の高さがうかがえる。

「選手団長の徽章」

東京オリンピックの入場行進の際、大島が胸につけた「CHEF DE MISSION（団長）」の徽章。

「日本記録賞」

昭和9年（1934）、大島が世界新記録を樹立したことに對し、日本陸上競技連盟から贈られたブロンズ楯。

「ブロンズ像」

昭和9年（1934）9月、甲子園で開催された日米対抗陸上競技大会で三段跳び15m82の世界新記録を樹立した時に贈られたブロンズ像。

「メダル」

第10回ロサンゼルスオリンピックの出場記念として、昭和7年（1932）に東京市長（永田秀次郎）から贈られたメダル。

「オリンピック平和賞のブロンズ像」

大島が昭和57年（1982）7月に国際オリンピック参加者協会から受けた「オリンピック平和賞」のブロンズ像。日本人初、世界で11人目の受賞であった。

「表彰楯」

ロサンゼルスオリンピックの三段跳びで3位となった功績を称え、日本オリンピック委員会から贈られた表彰楯。

2020年度企画展

「関西大学 学生スポーツの歴史」の記録

はじめに

2020（令和2）年は東京2020オリンピック・パラリンピックの開催年であったことから、先に記した2019年度秋学期企画展「スポーツの人 五輪の哲人 大島鎌吉」展に続いて、スポーツ関係の企画展を検討した。そして、本学での学生スポーツの歴史を振り返った時、1922（大正11）年の大学昇格後、総理事兼学長であった山岡順太郎が提唱した「学の実化」の理念のうち、「体育奨励」の具体化であったグラウンドの建設が大きな節目となっていることから、旧制大学期を中心に学生スポーツの歩みを振り返る展示会「関西大学 学生スポーツの歴史」を開催することとした。

2020年1月以降、新型コロナウイルス感染症が世界中に拡大し、2020年3月24日に、東京オリンピック・パラリンピックは1年程度の延期が決定された。本学では、感染拡大防止の観点から、学内への入構制限や休講処置が実施されたことにより、当初4月1日（水）開会であった企画展は、6月1日（月）からの開催となった。

一 展示パネル

企画展は例年通り、展示パネル10枚（ごあいさつ1枚、大1枚、小8枚）を掲示し、大型展示ケースには、関連資料を展示した。さらに今回の企画展では、展示室前の廊下に、大島鎌吉氏の三段跳びの跳躍

記録（ロサンゼルスオリンピック15・12m、世界陸上15・82m）を示し、その距離を体感できるようにした。

ごあいさつ

年史資料展示室では、2020年度の企画展として「関西大学 学生スポーツの歴史」を開催します。

関西大学は、130年を超えるあゆみの中で、学生スポーツ界だけではなく、世界を舞台に活躍する選手を輩出しています。今日の関西大学におけるスポーツの隆盛は、1926年に完成し、学内外の選手が集まり練習や試合を行ったグラウンドの建設に始まると思われます。当時東洋第一と称されたこのグラウンドは、1922年の大学昇格、千里山開設によるキャンパス整備の一環で建設され、山岡順太郎総理事が提唱し関西大学の学是となっている「学の実化」の理念のうち、「体育奨励」を具体化したものでした。

今年度の企画展では、関西大学が大学に昇格した1922年の前後から1930年代までを中心に、その前史である関西法律学校の時代も含めて、関西大学における学生スポーツの発展と選手たちが活躍した歴史を振り返ります。また、2020年は二度目の東京オリンピック・パラリンピックが開催されることから、関西大学にゆかりのオリンピック・パラリンピック選手をあわせて紹介します。

最後に、本企画展開催にあたりご協力を賜りました関係各位に厚くお礼申し上げます。

2020年4月

関西大学年史編纂室

大型パネル

大型パネルは「関西大学 学生スポーツの歴史」の導入として、関西大学における体育教育とスポーツに関する歴史を概観するパネルとした。合わせて、本学出身のオリンピック・パラリンピック選手および関係者を紹介した。

学校教育とスポーツ・体育

江戸幕府から明治政府へと政権が交代する中で、日本は諸外国の文化を積極的に受け入れて西欧化を進めた。スポーツや体育も、その過程で取り入れられ広がっていったが、最も影響が大きかったのは、組織的に実施された学校教育によるものであった。

小学校では、1886年の小学校令の施行により、学校教育の中に必須の教科として「体操科」が設けられ、全国で実施されていた。それに合わせて『戸外遊戯法』『小学普通体操法』などの手引書や体操図が出版された。

大学で体育が必須科目となったのは、第二次世界大戦後の1949年のことである（現在ではまた必須科目から外れる）。戦前の大学では科目としての体育はなく、課外活動として様々なスポーツが行われていた。

明治初年、東京大学の前身である開成学校や工部大学校が開校するが、そこでは外国人教師による指導で野球やサッカーが行われた。1883年には、同じく東京大学で初めての運動会が実施され、春秋の恒例行事として定着している。その後、1890年代には学生団体である校友会や学友会が各校で次第に組織され、そのもとで課外活動と

してスポーツが行われた。そして、学内だけにとどまらず、学校間での対抗戦や定期戦が開催されるようになった。こうしてスポーツが盛んになると、そこから、世界レベルで活躍する選手が育っていった。1932年のロサンゼルスオリンピックでは、陸上競技の日本選手団34名のうち29名が学生であった。

写真1 1886年発行の小学生徒体操之図（国立教育政策研究所教育図書館 貴重書デジタルコレクション）

写真2 『戸外遊戯法』（金港堂、1888年）掲載の競技旗奪（国立国会図書館デジタルコレクション）

写真3 東京第一大学区開成学校開業式之図（国立教育政策研究所教育図書館 貴重書デジタルコレクション）

写真4 課外活動として遠足も行われていた。写真は関西大学学友会が主催し、1910年10月9日の日曜日に行われた岩湧山（河内長野市）中腹加賀田山付近への遠足での記念写真。

関西大学のスポーツと体育

1886年に開校した関西大学の前身である関西法律学校は、当初は願宗寺や興正寺の寺院を校舎としていた。1903年に竣工した江戸堀校舎も、教室だけで運動場はなかった。関西法律学校は法律を学ぶ専門学校で、授業としての体育はなかった。学生の自主的なスポーツ活動としては、1906年の卒業生が、関西法律学校での学生時代を回顧して、「運動場がなかったので、街路に出てボール遊びをしたものだ」と語っている。このほか、先の東京大学の例と同じように、関

西法律学校でも運動会を行っていたことが新聞に掲載されている。もともと古い記事は、関西法律学校が最初の卒業生を社会に送り出した1889年のもので、5月5日の日曜日に堺の大浜公園で、教員と学生により運動会が開催予定であると伝えている。

1906年、福島学舎が竣工すると、運動会の会場は福島学舎校庭となった。また福島学舎移転と同時に、学生団体である学友会が組織され、そのもとで、相撲部、テニス部が活動を始め、さらに武術部（柔道・剣道）、野球部の創部が続いた。

1922年、関西大学は大学昇格のため、千里山にキャンパスを開設し、1926年には山岡順太郎総理事が「東洋第一」と称したグラウンドが完成する。このグラウンドには関西大学だけでなく他校の選手も集まって一緒に練習をし、数々の試合が行われた。

大正から昭和初期にかけては、関西大学に学生スポーツが定着した時代であった。相撲部、テニス部、武術部（柔道・剣道）、野球部のほか、陸上部、サッカー部、ラグビー部、馬術部、漕艇部、射撃部、水泳部などが創設され、多くの学生が活躍した。そしてそのなかから、世界を舞台に活躍し、オリンピック出場を果たす選手が誕生するのである。

写真1 関西法律学校の運動会開催を報じる新聞記事（『大阪朝日新聞』明治22年5月2日号第2面）

写真2 大浜公園（新版 堺名所絵葉書、堺市立図書館 地域資料 デジタルアーカイブ）

写真3 福島学舎（1913年頃）

写真4 千里山に完成したグラウンドとスタンド

二 小パネル

小パネルは、本学創立後すぐに教員と学生との交流を深めるために実施された運動会や、福島学舎での課外活動、グラウンド建設と山岡順太郎・倭父子の協力、各クラブの活躍の一端を紹介する内容とした。

【小パネル1】

関西法律学校の運動会

関西大学の前身である関西法律学校は、1886年に大阪西区京町堀の願宗寺を校舎とし、夜間の法律専門学校として開校した。法律を学ぶ学校であり、スポーツや体育は科目としては存在していなかったが、教員と学生の親睦を深めるために、運動会が開催されていたことが新聞記事になっている。

運動会の会場

大阪郊外の公園が運動会の会場となることが多いが、前夜から船に乗り京都や和歌山まで遠征する年もあった。1893年の会場である崇禅寺は、関西大学への通学通勤経路である阪急京都線崇禅寺駅北西にある寺院で、現在も広大な境内地を誇っている。この年は、記念写真が残されていて、最前列には創立者の有田徳一（左から4人目）と志方鍛（右から6人目）が写る。1895年の小林遊園地は、現在の梅田茶屋町辺りにあった遊園地で、懇親会を開いた鶴乃茶屋の跡地の記念碑も建っている。

運動会の競技

運動会では、相撲や綱引きといった、現在の私たちにもなじみの深い競技が実施されている。このほか、攻撃と防御の2組に分かれ旗を奪う旗奪や、刀剣・木刀・竹刀で打ち合う撃剣が実施されていた。「学校が一段と面白い趣向である」と紹介された「徒歩法律問題即答競争」という、どのような規則で行われたのか、よく分からない競技もあった。

写真1 当時の校舎興正寺で撮影された関西法律学校運動会記念

写真 (1893年4月)

写真2 広大な境内地を持つ現在の崇禪寺

写真3 鶴乃茶屋跡の石碑 (NU茶屋町プラスの西側出入口前)

写真4 錦絵に描かれた撃剣会 (国立国会図書館デジタルコレクション)

【小パネル2】

福島学舎の課外活動

1906年12月、関西大学は江戸堀から福島へ校舎を移した。福島学舎は、江戸堀校舎と比べて建物は2.5倍、敷地は6.5倍に拡大し、学校敷地の東側は校庭となった。福島学舎への移転間もない1907年1月に学生団体の学友会が組織され、学友会主催の行事として、テニス大会、相撲大会、陸上大運動会、遠足などが開催された。

テニスの普及

福島学舎の時代は、スポーツ活動が学生生活の一つとして定着し始

める時期で、当初はテニスと相撲がその中心であった。テニス大会は、1910年に第1回大会が学友会主催の行事として福島学舎校庭で開催されている。第3回大会 (1911年開催) は、関西学院、同志社、第三高等学校 (京都大学の前身) など28校の学生選手と社会人選手が参加して勝敗を競った。続く第4回大会 (1914年開催) では、数百名の観客を数えたという。

大人気の学生相撲

当時、テニスよりも人気があったスポーツは相撲で、関西学生相撲大会が1910年に始まっている。関西大学は第1回大会から欠かさず出場し、たびたび優勝旗を手にした。学生相撲は一般の関心も高く、学内で開催された相撲大会には、1000名もの観客が押し寄せ、福島学舎の運動場が人であふれたと伝えている。人気のあった学生相撲から角界へ進んだ学生もあり、本学出身の山錦善治郎は、学生相撲出身者として初優勝を果たした。

関西大学の運動部のなかでは、テニス部と相撲部が古い歴史をもつクラブであり、この2クラブに続いて、1915年に野球部と武術部 (柔道・剣道) が創部され活動を始めた。

写真1 福島学舎。校舎東側に校庭があり、テニスコートや土俵があった。

写真2 福島学舎時代のテニス部 (1907年～1917年頃の絵葉書)

写真3 福島学舎のテニスコート

写真4 福島学舎時代の相撲部 (1907年～1917年頃の絵

葉書

写真5 1000人近い観客が押し寄せた第2回校内相撲大会

(1914年)

写真6 本学相撲部出身の山錦善治郎(出羽海部屋)

写真7 創部時の野球部員(1915年)

【小パネル3】

千里山の開設とスポーツ施設の整備

1918年、文部省は大学令を公布し、帝国大学と同等の資格を持つ公立と私立の大学設立を認めた。法律の専門学校であった本学が大学令による大学へと昇格するためには、学校組織の整備とともに、学校施設の拡充が不可欠であった。そのため、手狭な福島学舎とは別に千里山へ新しいキャンパスを開設し、1922年6月5日、大学昇格を実現した。

大学昇格に合わせて、千里山の整備は着々と進められた。教育研究のための学舎建物や図書館のほかに、スポーツ関係施設も次々と竣工した。

千里山での主な施設完成年

1922年4月下旬 予科校舎

9月 テニスコート、土俵

1925年1月 相撲道場

1926年8月中旬 グラウンド

10月上旬 クラブハウス

1927年3月下旬 大学本館

1928年4月 図書館

5月 テニスコート

大学昇格と千里山の施設建設には、莫大な資金を必要とした。その調達にに応じ、募金活動を率先して進め、千里山の整備に努めたのが、当時大阪財界の巨頭であり、後に関西大学の総理事兼学長となる山岡順太郎であった。

写真1 建設工事が進む千里山の新キャンパス。建設中の予科校舎(現在の以文館のあたり)

写真2 昭和初期の関西大学全景。グラウンドから学舎を望む。左からクラブハウス・予科校舎・大学本館・図書館。

写真3 相撲道場。横綱を締める第5代学生横綱竹田繁七、中列の帽子を手を持つ理事宮島綱男(1927年ロバール・ド・ビー仏大使来学時の記念写真)

写真4 クラブハウス(1926年のグラウンド開場式写真)。クラブハウスの印象的なアーチは、現在同じ場所に建つ以文館のデザインに引き継がれている。

写真5 テニスコートと馬場(昭和初年の絵葉書)

【小パネル4】

体育奨励 学の実化を提唱した山岡順太郎

1886年、石川県に生れる。茨城県と国での勤めを経て、1898年に大阪商船株式会社に入社し、同社発展の基礎を築いた。また、

当時衰退していた大阪鉄工所（日立造船の前身）の社長となり、積極経営により経営を再建し、大阪財界に名を馳せた。1917年から1921年までは、土居通夫のあとを継いで、大阪商業会議所会頭を務めた。

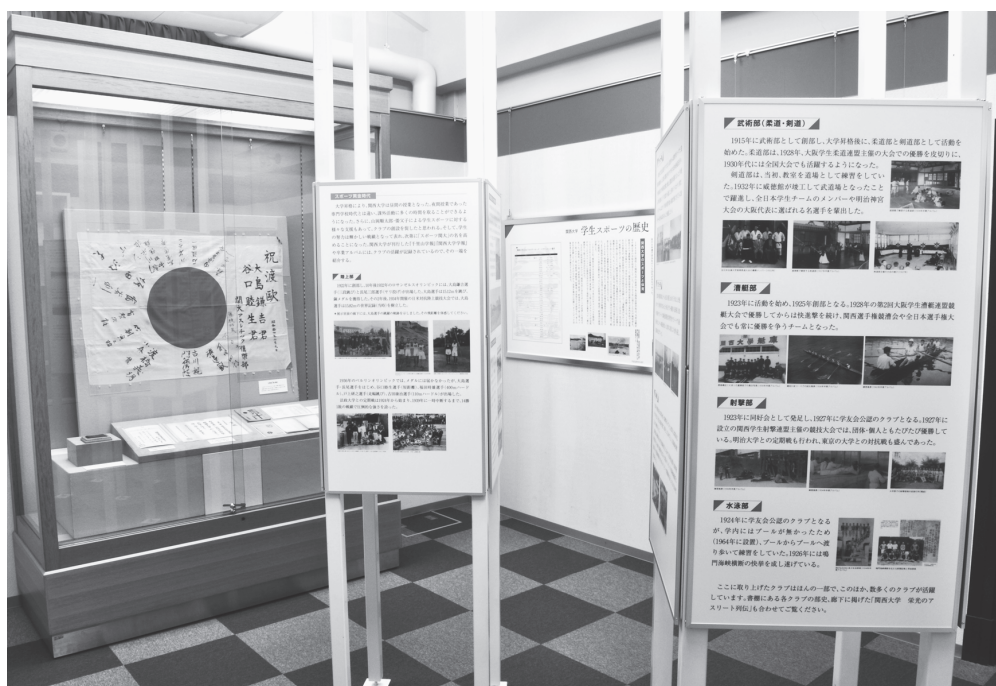
関西大学とのかかわりはこの頃からで、本学理事柿崎欽吾（当時大阪商船顧問弁護士）の斡旋により、1920年、本学評議員に推挙され、1922年総理事に翌年学長に選任された。千里山の建設整備、大学昇格などの大事業を遂行、本学中興の祖といわれる。1928年11月26日、62歳で没した。

1922年に関西大学が大学に昇格すると、当時総理事であった山岡順太郎は、新しい大学の理念として「学の実化（じつげ）」を提唱した。「学の実化」では①学理と実際との調和 ②国際的精神の滋養 ③外国語学習の必要 ④体育奨励の4点を力説した。この新しい理念は、その後、本学の学是となった。

山岡順太郎は、関西大学の教育・研究機能の充実に努めるとともに、「学の実化」の一つとして掲げた体育奨励のため、テニスコートや相撲道場などのスポーツ施設の拡充も積極的に行った。なかでも、扇形のスタンドを備え、山岡自身が「東洋第一」と称したグラウンドの建設は重要な事業であった。山岡は、「体育奨励」の意義を「団体的精神の訓練、学校全体としての剛健闊達なる気風の助長、真剣味の發揮という点などから必要不可欠である」と考えていた。（写真4・5）

これらスポーツ施設の整備は、大正末期から昭和初期における学生の充実した課外活動を支えることになった。

写真1 山岡順太郎（1886～1928）



展示室の様子

写真2 当時の関西大学首脳陣、前列左から柿崎欽吾、大鐘彦市、

山岡順太郎、武内作平、後列左から垂水善太郎、宮島綱男、池尾芳蔵、佐竹三吾（1922年11月）。

写真3 「学の実化」の理念に基づき、公開講座である学の実化講座が開講された。大阪市中央公会堂を設計した建築家片岡安も講師として招かれ（1923年4月25日「近代文明と建築工事」講演）、芳名録に開設して間もない千里山のキャンパスを描いた。

写真4 造成中のグラウンド（1925〜26年頃）

写真5 竣工したグラウンドとスタンド（昭和初期の絵葉書）

【小パネル5】

学生のよき理解者 山岡倭

山岡倭（やまと）は山岡順太郎・いち子夫妻の長男として、1890年に誕生した。1912年、慶應義塾大学を卒業し、大阪鉄工所（現日立造船）に入社。その後、大阪鉄道（現近畿日本鉄道）、大鉄百貨店（現近鉄百貨店）などの重役を務めた。1939年5月30日、49歳で没した。

関西大学と山岡倭の関係を見ると、学生たちに物心両面で強力な支援を行ったことが大きな功績として挙げられる。例えば、関西大学の陸上部や柔道部の学生を書生として家に置き、日常の生活だけでなく、練習場所も用意して競技面での支援もしていた。また、大正末から昭和初期にかけては、野球部やサッカー部など運動各部が頻繁に海外遠征を行っているが、海外渡航が今ほど簡単ではなかった時代に、そう

したことが実現したのは、倭から資金面での援助があったことを、当時の関係者が口をそろえて語っている。

スポーツ万能であった山岡倭が特に好んだのは野球で、関西大学野球部の発展に情熱を注いでいた。それは、日本中の名選手が関西大学に入学するよう、自らスカウトに出向くほどであった。そして、倭の思いに応えるように、野球部は黄金時代を迎え、1931年発足の関西六大学野球連盟のリーグ戦では、1943年に第二次世界大戦のため中断されるまで、関西大学野球部は、優勝12回、準優勝4回の好成績を残している。

また、山岡倭の支援は野球部にとどまらず、漕艇部にはボートを、軽音楽部には楽器を寄付したこともあった。さらに、関西大学北陽高等学校の前身である北陽商業学校（のち北陽高校）の創立にも関わり、現在、創立者と位置づけられている。

写真1 山岡倭（1890〜1939）

写真2 野球部のハワイ遠征ポスター（1933年）。野球部は1926年から1936年の間に、8度の海外遠征を行っている。

写真3 1933年7月18日に行われた、ハワイオアフ島のワイアワ日本人チームとの記念写真。試合は2―2で関大野球部の勝利。2度のハワイ遠征には、後年プロ野球大阪（現阪神）タイガースで活躍する名投手西村幸生選手（前から2列目左端）が参加した。

写真4 千里山にあった洋風2階建ての野球部合宿所。山岡順太郎総理事の好意で提供されていたという。

写真5 『千里山学報』に掲載の北陽商業学校生徒募集広告。関西

大学校友への特別入学制度が設けられていた。

【小パネル6】

スポーツ黄金時代

大学昇格により、関西大学は昼間の授業となった。夜間授業であった専門学校時代とは違い、課外活動に多くの時間を取ることができるようになった。さらに、山岡順太郎・倭父子による学生スポーツに対する様々な支援もあって、クラブの創設を促したと思われる。そして、学生の努力は輝かしい戦績となって表れ、次第に「スポーツ関大」の名を高めることになった。関西大学が刊行した『千里山学報』『関西大学学報』や卒業アルバムには、クラブの活躍が記録されているので、その一端を紹介する。

陸上部

1922年に創部し、10年後1932年のロサンゼルスオリンピックには、大島鎌吉選手（三段跳び）と長尾三郎選手（やり投げ）が出場した。大島選手は15・12mを跳び、銅メダルを獲得した。その2年後、1934年開催の日米対抗陸上競技大会では、大島選手は15・82mの世界記録（当時）を樹立した。

*展示室前の廊下には、大島選手の跳躍の軌跡を示しました。その飛距離を体感してください。

1936年のベルリンオリンピックでは、メダルには届かなかったが、大島選手・長尾選手をはじめ、谷口陸生選手（短距離）、福田時雄

選手（400mハードル）、戸上研之選手（走幅跳び）、古田康治選手（110mハードル）が出場した。

法政大学との定期戦は1924年から始まり、1939年に一時中断するまで、14勝1敗の戦績で圧倒的な強さを誇った。

写真1 著しい活躍を見せた陸上部（1934年卒業アルバム）。

左端は長尾選手、左から8人目が大島選手。

写真2 日の丸のユニフォームを身に着けた大島鎌吉選手（1934年卒業アルバム）

写真3 長尾三郎選手（右）（ロサンゼルスオリンピック練習時の写真）

写真

写真4 合宿中の陸上部、右から1人目…大島選手、3人目…戸上研之選手、7人目…長尾選手（1932、3年頃）

写真5 第1回法関定期戦の記念写真（中央…山岡順太郎）

【小パネル7】

サッカー部

1922年に学友会公認のクラブとなり、1923年からは関西学生リーグで三連覇の実績があった。1925年、関西大学のクラブの中では初の海外遠征を行い、中国の復旦大学や東亜同文書院と対戦し、国際交流の先駆けとなった。その後も、中国（1928年）、ジャワ（1932年）へ遠征した。当時のジャワはオランダ領で、ジャワチームにはオランダ出身の選手が加わる強敵で1勝もできず、さらに強いチームを作らねばならないことを痛感したという。

写真1 試合風景（1928年卒業アルバム）

写真2 ジャワ（インドネシア）に遠征したサッカー部（1932年）

写真3 大阪商科大学との試合、6-2で関西大学の勝利（1931年）

ラグビー部

1923年の創部当時は、1チーム分15人の選手しかおらず、そのほとんどが他のクラブとの掛け持ちであった。その後、ラグビー経験者の入部が続き、1926年の阪神ラグビーリーグは4戦全勝、関西大学専門学校ラグビーリーグでも優勝を果たし、チームの躍進が始まった。1931年には招きにより台湾へ遠征し、活躍の場を広げ続けた。

写真1 練習風景（1936年卒業アルバム）

写真2 試合風景（1934年卒業アルバム）

写真3 台北新公園運動場での遠征試合（1931年）

馬術部

1924年の創部当時は、軍馬を使って練習を行っていた。1927年には軍馬の払い下げを受け、千里山に厩舎を建て、当時としてはめずらしく、自馬6頭を飼育しながら練習を行った。

馬術部は各種乗馬大会で好成績を残した。なかでも宮本恒夫選手（1938年経済学部卒）は、1940年に開催予定であった東京オリンピックの馬術候補選手に選ばれ、その活躍が期待されたが、オリンピック開催権を返上したため、幻の代表に終わった。

写真1 試合風景（1937年卒業アルバム）

写真2 馬術部集合写真、前列左から2人目が宮本恒夫選手（1938年卒業アルバム）

【小パネル8】

武術部（柔道部・剣道部）

1915年に武術部として創部し、大学昇格後に、柔道部と剣道部として活動を始めた。柔道部は、1928年、大阪学生柔道連盟主催の大会での優勝を皮切りに、1930年代には全国大会でも活躍するようになった。

剣道部は、当初、教室を道場として練習をしていた。1932年に威徳館が竣工して武道場となったことで躍進し、全日本学生チームのメンバーや明治神宮大会の大阪代表に選ばれる名選手を輩出した。

写真1 威徳館で練習する柔道部（1934年卒業アルバム）

写真2 全日本全満大学高専柔道大会の優勝メンバー（1932年）

写真3 威徳館で練習する剣道部（1937年卒業アルバム）

写真4 剣道部主催の大会の様子（1927年）

漕艇部

1923年に活動を始め、1925年創部となる。1928年の第2回大阪学生漕艇連盟競艇大会で優勝してからは快進撃を続け、関西選手権競漕会や全日本選手権大会でも常に優勝を争うチームとなった。

写真1 都島橋近くにあった艇庫前での集合写真（1930年卒

業アルバム

写真2 瀬田川淀コースでの試合風景（1936年卒業アルバム）

写真3 練習風景（1942年卒業アルバム）

射撃部

1923年に同好会として発足し、1927年に学友会公認のクラブとなる。1927年に設立の関西学生射撃連盟主催の競技大会では、団体・個人ともたびたび優勝している。明治大学との定期戦も行われ、東京の大学との対抗戦も盛んであった。

写真1 練習風景（1930年卒業アルバム）

写真2 練習風景（1934年卒業アルバム）

写真3 大学祭での射撃部員の仮装行列（戦前）

水泳部

1924年に学友会公認のクラブとなるが、学内にはプールが無かったため（1964年に設置）、プールからプールへ渡り歩いて練習をしていた。1926年には鳴門海峡横断の快挙を成し遂げている。

写真1 飛び込み台に並ぶ水泳部員（1934年卒業アルバム）

写真2 鳴門海峡横断を伝える新聞記事と参加部員

ここに取り上げたクラブはほんの一部で、このほか、数多くのクラブが活躍しています。書棚にある各クラブの部史、廊下に掲げた「関西大学 栄光のアスリート列伝」も合わせてご覧ください。

三 大島鎌吉氏の三段跳び跳躍記録の展示

本学の卒業生である大島鎌吉氏は、2019年度秋学期企画展でも紹介したように、1932（昭和7）年のロサンゼルスオリンピック陸上三段跳びの銅メダリストで、1934（昭和9）年の日米対抗陸上では当時の世界記録を樹立している。この二つの記録を、次のような解説文を添え、展示室前の廊下に足形と白線により示し、観覧者の方々に体感してもらえるようにした。



着地点と跳躍距離の表示



三段跳びステップとジャンプの踏み切り位置の表示



展示室前の廊下全面を用いた跳躍記録の展示

陸上三段跳び オリンピック&世界新記録 跳躍の軌跡

床の足型は、1932（昭和7）年のロサンゼルス五輪・陸上三段跳びに出場し、15 m 12 cm の記録で銅メダリストとなり、1934（昭和9）年の日米対抗陸上では15 m 82 cm を跳んで世界記録（当時）を樹立した大島鎌吉選手の跳躍の軌跡を示したものです。オリンピック銅メダル（茶色の足型）・世界記録（黄色の足型）のホップ、ステップ、ジャンプを体感してください。

四 展示資料

縦型展示ケースには、学生スポーツに関わる旧制大学期の資料を中心に、次のような資料を展示した。

「日章旗寄せ書き」

1939年、モンテカルロ（モナコ公国）で開催の国際大学スポーツ週間に参加した時の寄せ書き。大島鎌吉、谷口睦生ともに関西大学出身で、大島は日本選手団長を務めた。

「オリンピック選手歓迎 日芬国際陸上競技大会パンフレット」

1932年ロサンゼルスオリンピック後の9月に開催された、陸上競技大会のパンフレット。芬国（フィンランド）ほか海外からの招待選手8名、日本選手男女合わせて34名が出場し、多数のロサンゼルスオリンピック代表選手が含まれていた。関西大学からは、大島鎌吉選手と長尾三郎選手が出場している。



展示資料

「関西大学対全台湾対抗 陸上競技大会 パンフレット」

1937年7月10日11日、台北帝国大学競技場で開催された陸上競技大会のパンフレット。関西大学選手15名、台湾選手49名が競い合った。関西大学チームの監督は、大島鎌吉が務めた。

「第1回関西射撃連盟大会 300m団体 一等賞状」

「射撃部マネージャー 辞令」

「鳴門海峡決死泳破記念 たばこケース」

1926年8月1日、水泳部員により鳴門海峡横断の遠泳が決行された。28分4秒の横断新記録で泳ぎ切り、このたばこケースが記念品として授与された。

四 新型コロナウイルス感染症への対応

新型コロナウイルスの感染拡大防止のために展示室を閉室したことから、当初予定していた4月1日(水)からの開催を延期し、会期は6月1日(月)から2021年3月19日(金)までとした。また、感染予防対策として、昼間に閉室し、換気と拭き取り清掃を実施した。この間の経過は、次の通りである。

4月1日(水)～5月31日(日)

展示室閉室

6月1日(月)～6月14日(日)

学内関係者対象に開館(10時～15時30分)

昼間(12時～13時30分)は閉室し、その間に換気と拭き取り清掃を実施

土曜日・日曜日閉室

6月15日(月)～7月31日(金)

一般観覧者の見学を再開(10時～15時30分)

昼間(12時～13時30分)は閉室し、その間に換気と拭き取り清掃を実施

土曜日・日曜日閉室

9月21日(月・祝)～3月19日(金)

通常開室(10時～15時30分)

昼間(12時～13時30分)は閉室し、その間に換気と拭き取り清掃を実施

日曜日、大学が定めた休日閉室

(年史編集室)